

翌日から自動小銃に小突かれながら早くも冬到来を思わせる原始の林へと伐採作業であった。

翌日になると何組かに労働部隊が混成されて牡丹江からの仲間は四散状態となったのである。いよいよよくるものがくるか、と疑心暗鬼のなかでノルマが課せられ、ノルマが達成できないと責任者である私に重営倉的な罰が課せられた。部下が助けようと努力すると自動小銃で脅かされ、止むなく引き下がっていく姿を格子の中から涙して眺めざるを得なかった。

足下に水が溜まり、丸太に乗っかり、格子にしがみつぎ、わずかばかりの黒パンにかじりつく状態、地獄図そのものである。

二十三年故里に帰ってみると、妻は二十一年八月帰国予定だったが港の検査で伝染病と診断され、新京の病院へ逆戻り、そこで命を落としたのである。病院にいた職員の方が実家に遺髪を届けてくれた。四人の子供達は可哀相にも引き揚げ途中全員、若い命を落としたとの伝言である。戦争は嫌だ。

## シベリア鉄道は抑留者が復旧した

新潟県 山崎 清

部隊は満州第四四一部隊、終戦は満州方正県方正、武装解除後は貨車に乗せられ鍵を掛けられると延々と一週間近く、一日に三回の食糧給与以外は罪は開かれなない。その三回が用便の唯一の機会である。時折りガタンと音がして停車しても付近を見ることができない。窮余の一策の言葉どおり、貨車内にあった金属片（八番線位の針金、その他）を集めて先端を平らにして、貨車の片隅に穴をあける。

辛抱強く交替交替で穴をあける作業を続ける。一日位かかって外を眺める、といっても一部分しか見えないが、光が入るだけでも良かった。床には各人停車しないときに用便できる位の穴を開けることができた。

監視のソ連兵も初めは「何事か」と銃を構えていたが、そのうちようやく理解したらしく、給食時には愛

想のよい笑顔をみせるのだった。出発してからは夜になってもそれ程の寒さを感じなくなってきた。ということは、暖かい地方へと貨車が走ってるんだらうと皆で頷き合っていた。

貨車が止まり扉が開かれ、ソ連兵数名、将校二名が来て降車を命じた。

降りてみると広々とした原野が視野に入り、丘の上にはまばらに兵舎跡らしいところが見られる。隊列を整え歩哨の後に続く。

三十分も歩いたろうか、共産党の幹部らしい民間人二名が歩哨に近づき、新たな案内人となって隊列を案内し、兵舎跡らしい建物へと我々を導いていく。

後で解ったことだが、対ドイツとの戦闘で激烈なレニングラード攻防戦が展開されたために、殆どが廃墟の街と化し、私達の収容された建物もその被弾跡も生々しい傷跡が多数箇所にあつてた。

建物の周囲は有刺鉄線が張りめぐらされ、一部が門扉になっていた。

長い旅……貨車で抑留旅……を弾痕跡も生々しい兵舎

跡でその疲れを休めることになった。これが建物らしい中での収容所生活の第一日、苦しい強制労働前の一夜となった。

建物内を整理し、ありあわせの材木や板片で三隅に寝る場所を形づくり、毛布や防寒具で寝床をつくる。持参した食糧もまだかなりの量はある。幸いにも屋外に残されたドラム缶二個を使ってかまど（煮炊き場所）と暖炉を造る。落ち葉や薪になる材料を集めて、食事を炊事係をやっていた経験者四人でつくる。腹が一杯になってくると、ドッと睡魔が襲ってくる。身体を横たえる間もなく深い眠りに落ちこんだ。腕時計は十時近くを指していた。

ソ連兵の「ダワイヴィストラ」の声で目をさます。午前七時、炊事係からの朝食をとるや否や、屋外に整列、身体検査が行われた。検査とは名ばかりの略奪行為である。腕時計、万年筆を初め、めぼしい身のまわり品が奪われていく。じーっと我慢するしかなかった。

民間人姿のソ連人五人が軍用トラックにスコップ、ツルハン、テコ棒、それに一輪車もある荷を降ろした。

五人一組の班にされて、その道具を渡されると徒步行軍である。約十分程のところに線路（広軌）跡があった。曲がりくねって途中で無くなっている。通訳が今日から鐵路建設をやるんだということで、まずは跡かたも無いところをならして路床づくり、モッコになる材料を金網と担ぎ棒でつくる。ソ連兵が感心した顔で眺めていた。

トラックで土と石材が運ばれてくる。それをスコップで積みあげ路床とする。大木とその太いところの枝二本で「石バカッチョ」の台木をつくり、二人で路床を上から「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と叩き固める。土方仕事は経験があっても線路工夫作業は初めての者ばかり。「無条件降伏」のこの身体、なんでこんなところでこんな苦勞をしなければならないのか、心の内で叫びながら作業を続ける。

こうして毎日毎日鉄道の路床づくりが続く。一か月も経った頃、大型トラックに線路が運ばれてくる。枕木になる丸太を焼いて枕木に仕上げる。みんなで掛け声をかけあいながら枕木の上に鉄路を置き、ツルハシ

で線路と枕木の間を固めていく。線路と枕木をつなぐ金具をどうするか。みんなで相談し通訳を通して鍛冶場と紙材を請求する。翌日返事をするということだった。こうした経過で線路が固められて試験的に鉄路が出来上がったところを何回も往來して「カンチャイ」となり次の場所へ移動していく。広野の落日は非情にも遅い。薄暗い帳がくる迄作業、林を切り拓き、崖を削り、測量をしながらの悪戦苦闘の連日も段々と多くなってくる。

時折はドイツ人の抑留労働者も見かける。こうした抑留者の労働によってシベリア鉄道は修復や新たな路線をつくっていった。

吹雪く日、雨の日、風の日も容赦のない強制労働の日々が二年を過ぎて「ダモイ」の日を迎えたときは思わず万歳を叫び合った。